

科学博物館ニュース速報



Vol.50 2022/3/25

館長よりメッセージ

➤ 科学博物館長・工学府工学部教授 金子 敬一

前号の科学博物館ニュース速報でお伝えしたように、12月13日(月)に、私と横山副館長、齊藤特任助教、および繊維技術研究会の曾木氏、葛西氏とともに長野県の岡谷蚕糸博物館を訪問しました。主な目的は、当館で推進しているプロジェクトに関する視察と意見交換です。当館では、「国産自動繰糸機HR-2の3Dデジタル復元と動態展示継承モデル開発」という研究題目で、日本学術振興会の科学研究費補助金によるプロジェクトを進めており、研究代表者が齊藤特任助教で、私や横山副館長などが研究分担者、技研メンバーが研究協力者として参画しています。当日は、高林千幸館長(本学OB)や林久美子学芸員に案内していただき、博物館内にフルスペックの製糸工場が実際に稼働している様子を圧倒されました。また、私どもの科学博物館で何とか動態展示を維持しているHR-2繰糸機の保守管理に関して、技研メンバーを中心に草間商会の草間健一代表(本学OB)や新增澤工業株式会社の星野伸男氏と突っ込んだ意見交換を行いました。また、草間代表には、COVID-19が落ち着いた後、当館にあるHR-2繰糸機の状態確認とオーバーホールをお願いしました。

さて、COVID-19といえば、オミクロン株による第6波もピークアウトしたとの観測があるものの、新規感染者数は、まだまだ高止まりしているようで、こちらも安心できません。私も、先日、第3回目のワクチン接種を済ませました。科学博物館では、4月以降も引き続き、しっかりと感染対策を取りつつ一般向けの公開を継続する予定です。皆様、どうぞ科学博物館まで足をお運びください。なお、4月1日から新任の特任助教として上田裕尋氏が着任されます。子供の頃から博物館の学芸員になるのが夢だったので、その夢がかなった今、当館で思う存分活躍していただきたいと思います。

最後になりましたが、平和の祭典であるパラリンピックが開催中であるにもかかわらず、ロシアがウクライナに攻め込むという信じられない事態が発生しました。どのような理由があっても武力の行使は許されないと考えます。この悲劇が一刻も早く解決されることを強く望みます。



目次

- ・館長よりメッセージ/金子 敬一……………P.1
- ・次年度へ向けて/横山 岳……………P.1-2
- ・後期学芸員実習「デジタルアーカイブ演習」
/齊藤有里加、学芸員課程履修生……………P.2-5
- ・博物館支援団体報告「次年度へ向けて」
/博物館支援団体……………P.5-6
- ・閉架書庫調査～博物館所蔵の業界史・社史
/田中万祐子……………P.6
- ・メディア掲載報告/保池 琢……………P.6

次年度へ向けて

➤ 科学博物館副館長・農学部農学部准教授 横山 岳

府中キャンパスにある博物館分館は開館されていますが、来館者がほとんど無い状態が続いています。例年、学園祭時には多くの来館者があり、農学部 musset による企画も盛況でしたが、2020年の学園祭は中止、2021年は校内に入る人数制限をしたこともあり少々寂しい限りでした。農学部 musset も学園祭の企画が立てられないことから、新メンバーを加えることができず、解散状態に陥っています。2年間のコロナ禍が続くと musset だけでなく、学内の多くのサークル活動に支障がでているようです。残念ですが、なかなか妙案が浮かばずにおります。

思い返せば、「猫神様と養蚕展」の企画展の最中、2019年3月から博物館が閉館され、企画展のイベントも中止となってしまいました。なかなか好評の企画展だったので尻すぼみになったのは残念でした。「猫神様と養蚕展」の図録(図1)も好評のようで、問い合わせが続いています。先日はアメリカのフロリダ州立大学のリングリング博物館からも問い合わせが来ました(日本語の図録なのにどうやって知ったのか謎です)。企画展の図録と言えば、通常企画展の開催時には出来ているものですが、科学博物館ではこれまで企画展の図録を作って来なかったため、勝手がわからず、企画展が終了後によりやく印刷されてきました。これは私の執筆が遅かったせいです。反省しております。しかし、出来上がった図録は非常に良い

ものが出来たと自負しておりますし、手に取っていただいた方々からはお褒めの言葉をいただいております。現在、博物館では1部1,000円で販売しておりますが、前述したように学外からの問い合わせも多く、博物館グッズとともに通販するべく模索中です。

分館でも「猫神様と養蚕展」のミニ企画展を計画していますが、これも開催する時期を模索しているうちに2年が過ぎてしまいました。4月以降、コロナ禍がなければ開催したいと思っています。



(図1)「猫神様と養蚕展」図録館内にて好評発売中です

後期博物館学芸員実習

➤ 科学博物館学芸員・特任助教 齊藤有里加

後期学芸員実習は「デジタルアーカイブ」をテーマに、今後学芸員のスキルに必要なデジタル化によるコレクションの管理と活用について当館資料を用いた演習を行いました。実習はデジタルアーカイブについての座学、「錦絵」実資料を用いた撮影・調書・目録入力・キャプション作成・額装・展示の体験によってデジタル化の実装を学びました。また「ジャパンサーチ」のツールを活用した各自のデジタル展示を作り、12月のオンライン発表会で展示発表を行うとともに、コンテンツの活用の工夫、課題について国立国会図書館、科学博物館職員、外部博物館職員と意見交換を重ねてデジタルコンテンツと実資料の展示の違いを体得しました。また、自然史資料では、植物標本の制作とAIによる生物同定アプリを用いてICTを活用した生物探索「バイオブリッツ」を経験しました。

今年度の学芸員実習において、前期ではグループワークによる遠隔での資料解説、並びに博物館が内包する無形資料（動態展示）の継承について考察を重ね、後期では個別ワークによる資料のデジタル化およびコンテンツの活用の実際について、博物館職員当事者との意見交換を行いながらその可能性を探りました。今回の博物館ニュースでは、多地点でのバイオブリッツ試行としてご協力いただいた姫路科学館学芸員からのコメント並びに、最後の課題として求めた「博物館学芸員にこれから求められるスキルとは」についての学生からの意見を紹介します。

自然史系オンラインイベントの可能性～バイオブリッツ

➤ 姫路科学館・学芸員 松本 万尋

オンライン化が加速する新しい時代の自然史系イベントとして興味深く思い、参加させていただきました。オンラインの要である通信面では、音声や映像のラグを感じず遠隔でも活発に意見交換で

き、ミュージアムにおけるオンラインイベントの可能性に期待が高まりました。バイオブリッツそのものは、身の周りの環境を真剣に観察し、目についた生物を片端から同定していくことで「身近にこんな生物がいるのか」と気付きやすくなる大変面白いプログラムでした。

同時に複数地点のデータを収集する取り組みも、競争意識を生み出し楽しい雰囲気づくりに繋がっていたと感じます。各地点の環境を紹介する時間をとり、それぞれの地点でどのような風景の中を探索しているのかが伝わるとさらに楽しくなりそうですね。

イベント化の課題として、今回は意識的にスマートフォンアプリのAIに頼るよう努めましたが、誤同定が目立ちAIの精度はまだあまり高くはない印象でした。運営陣には幅広い分類群の誤同定にある程度気付くことができる豊富な知識を持つ人材の参加が求められそうです。また、電波状況が同定のスピードを左右するため、撮影と同定は作業時間を分けても良いかもしれないと思いました。

当館ではフィールド観察をイベントとして実施することがあり、この度の取り組みは大変勉強になりました。素晴らしい機会をいただき感謝申し上げます。



端末アプリを使用してバイオブリッツを行っています。見つけた生き物はAI機能により、画像で種の判定を行います。

学芸員実習総括

テーマ「これからの学芸員に求められるスキル」

➤ 学部 学科3年 轟善勝

学芸員にこれから求められるスキルは「繋がる力」だと思います。コロナ禍においてデジタルの利便性が認識され、デジタル資料を扱う力が一層求められるようになってきましたが、デジタル資料を用いて何ができるかについては、まだ進化が必要な新しい領域であると感じます。各博物館が独自にデジタル資料の使い方を考えていくことも大切ですが、失敗するにせよ成功するにせよ、その経験を他館と共有できればより良いものが生まれ、さらに先に、もっと早く、たどり着くことができるはずです。デジタルに限らず、他の領域も繋がればそれだけ新たなことができる可能性も増えるでしょう。学芸員課程の中で様々な人の話を聞き、新たな知見をたくさん得られたからこそ、そう思いました。今まで学芸員に「繋がる力」が足りなかったとは思いませんが、デジタルの利便性が認識され、テレワークの推奨などにより環境が整った今、より一層強化していくことができるのではないのでしょうか。

➤ 学部 学科3年 長野志歩

学芸員にこれから求められるスキルは、主に3つあると考える。1つ目は、時代に合わせて柔軟に対応する力である。例えば現在のコロナ禍のように、時代の風潮が大きく変わることがある。そのようなときには、企画を考える際に時代のニーズに合わせることや、

新たなツール（現在であればオンラインなど）を積極的に取り入れる柔軟な考え方が求められると思う。

2つ目は、自分の考えや知識をまわりにうまく伝えるための表現力である。学芸員の仕事では、展示を通していかにお客様に作品について知ってもらい、興味を持ってもらうかが大事になってくる。ゆえに、キャプションなどを通して自分の言葉で作品の特性をきちんと伝える力が必要とされるだろう。

3つ目は、計画性である。博物館の展示には、展示スペースや他博物館からの作品の借用期限や展示期間など、さまざまな制約が存在する。それらの制約の中で展示を完成させ、成功させるのが学芸員の役割であるため、きちんと計画を立ててその通りに実行していくことが必要であると思う。このように、学芸員には柔軟性・表現力・計画性などを兼ね備えたスキルが必要とされると私は考える。

➤ 学部 工学科3年 高橋龍之介

本課程を経て、私が学芸員にこれから求められるであろうと思ったスキルとして、1つ目はパソコンやインターネット、カメラ等をはじめとした機器を用いて資料をデジタル的に保存、そして利用するスキルである。常に劣化を続ける資料たちを半永久的にデジタルデータとして保存、そして気軽に利用できる技術によるメリットは本課程で実際に触れることでそれを目の当たりにした。2つ目は何があっても工夫・話し合いができるというスキルである。このコロナ禍の中で我々はオンラインでの発表会を行った。Zoomを利用したうえで見ている人にどうやってガラ紡についての情報を伝えるか、どういう発表の仕方をするか、ということそれぞれの班で試行錯誤した。こういったまたいつか起こるであろう非常事態の際、学芸員たちは学芸員としての仕事を放棄せず、如何にしてそれを行うかという工夫・話し合いをするスキルが必要である。以上が本課程を経て私が思うこれからの学芸員に必要なスキルである。斎藤先生、本課程はとても楽しく、そして貴重な経験でした。ありがとうございました。



初めての学生主体のオンラインイベント。試行錯誤で準備

➤ 学部 工学科3年 酒井明香

今回の学芸員実習を通して、これからの学芸員に求められるのは「双方向性を持たせながらオンライン化（デジタル化）に対応するスキル」ではないかと感じた。オンライン化やデジタル化が進んだ社会において、コロナはその動きをさらに加速させたといえる。今後も様々な分野におけるオンライン化が進んでいくと考えられるなかで、必然的に博物館においてもオンラインの利用拡大が求められるだろう。

実習ではイベントの実施やギャラリーの作成をオンラインで行ったが、今後はオンラインを利用した活動に対応できる学芸員の存在が非常に重要になってくると思う。オンラインによるイベントの実施はもちろん、デジタルアーカイブの活用やポーンデジタルなものをどのように管理していくかを考えられることが大切なのではないか。また、今回の実習でも問題の一つとなっていた「オンラインにおいてどのように双方向性を持たせるか」という大きな課題にきちんと向き合っていくことが求められると考える。

➤ 学部 工学科3年 中村悠里

技術の発展やコロナ禍の経験により、デジタルアーカイブやオンライン展示が一気に普及している現在の状況を見ると、今後、学芸員にはオンラインシステムを安全に、かつ効果的に取り扱うスキルが絶対に必要であることがうかがえる。

例えば、相手の目の前にモノ資料が無くても、デジタル資料の活用やキャプションの作製、自らが語る力などを駆使して伝えるスキルは特に求められてくるだろう。しかし、モノ資料を見ることによるのみ伝わる雰囲気というものがあること、思い出による教育効果、さらには（日本の博物館法の下では）博物館の経営維持のための収入確保の必要性などを考えると、博物館に足を運んでもらうことも重要である。これからは、「ネットで見られるからいいや」と思わず、博物館に足を運びたいと思わせるような企画力および発信力、実際に見たくなるように資料をレイアウトするスキルなども求められる時代となってくるだろう。

➤ 学部 工学科3年 小笠原遥香

前期及び後期の学芸員実習を通して、技術の発展に伴い、これからの学芸員には現地での資料管理だけでなく、機械を活用し、オンラインでの資料の活用やデータの保存を行うためのスキルが求められることを実感した。直近の2年間では感染症拡大の影響でやむを得ず対面の展示やイベントをオンラインイベントで代替する必要があったが、感染症の収束後もオンラインの利点を生かした資料の取り扱いを行うことにより、これまでよりも効率的に、資料そのものやデータの保管が可能となり、さらに博物館の来館者も近隣の居住者や旅行者に限定されることが無くなるだろう。

そのため、これからの学芸員は現物の資料の展示に関わる知識や技術、これまでも必要とされてきたデータの保管方法に加え、オンラインの利点をどのように活用し、現物資料の展示や保管と組み合わせるかを考え、実行する能力が求められると考える。

➤ 学部 工学科3年 坪井由明

学芸員に求められるスキルとしてはコミュニケーション能力と宣伝能力だと考える。

コミュニケーション能力が重要だと考える理由は、学芸員は多くの人と協力する必要があるからである。展示する資料の請求や展示場所の交渉、学芸員関係者との協力など、学芸員の対話の範囲は多岐に渡る。その中で業務を円滑に運び、イベント開催までの流れをスムーズにするために必要なのは、コミュニケーション能力である。

また、宣伝能力は学芸員には欠かせないものであると考えることができる。イベントを開くにあたり、最も重要なことは多くの人に見てもらふことである。様々な媒体、人脈を用いて宣伝を有効に行うのは、能力が必要となる。特徴的な展示、内容の良し悪しに関わらず、イベントの成功の是非は宣伝一つで決まると言っても過言ではない。それゆえに、宣伝する能力を磨くことは学芸員に求められることの一つになる。

➤ 学部 工学科3年 山口大樹

学芸員にこれから求められるスキルとして、デジタルに関する技能が挙げられる。今回の実習で扱ったように、資料の情報としての保存や資料の開示、資料の展示などにおいてデジタル化が進んでいる。とくにこの数年はコロナウイルス感染症の影響もあり博物館がその機能のいくらかを停止せざるを得ない状況に陥ってしまった。自身も学業の一環として博物館を訪れる用事があったのだがそれについても中止せざるを得なかった。

このように、以前までの状態では博物館が長期的に休業した場合、外部への情報の開示が停止することになる。博物館としての意義を果たすためにはいくつかの部門におけるデジタル化が必要不可欠である。その為に学芸員にはデジタル化に対する理解と、実現させるスキルが求められる。対面で行うサービスや展示に比べて恩恵を受けない人も多く、学芸員の感じる達成感等も少ないかもしれないが、時代ごとに求められている形の一つとして受け入れていく必要があると考える。

➤ 学部 工学科3年 武政昇汰

学芸員として重要な能力は、自分の専門外の人とも協力できる能力である。

学芸員の業務は資料の収集・保管から、イベントや展示の作製まで多岐にわたる。加えて、コロナ禍において、博物館におけるオンラインコンテンツの活用の利点や重要性も明らかになった。それらすべてを自分たちのみで行うのは不可能で、専門外の外部方の協力を仰いだり、外注をしたりすることが不可欠である。

そこで専門外の人ともスムーズに協力できる必要があり、そのためにいくつかの能力が必要となる。一つ目は広い知識である。何かの目標に向けて外部に協力を求めるにせよ、どんなことを頼める先があり、どれくらいの時間やお金がかかり、それによって何が得られるかを正確に知らなければ、目標のものを得ることはできない。二つ目は物事を分かりやすく伝える能力である。目的が専門的なものであるほど、専門用語が多くなり、人に伝えるのが難しくなる。自分の目的を専門外の人にも分かりやすく伝えなければ円滑で広域な協力関係は築けないだろう。

➤ 学部 工学科3年 倉田樹

私が考える学芸員にこれから求められるスキルは、多様な視点を持って資料を適切に伝承・保存できること、そしてデジタル資料を適切に扱えることの2つである。

まず、資料を適切に伝承・保存できるスキルは、博物館等で活動する上で必須となるものである。また、博物館等で活動する際、専

門家からの視点だけでなく、普段資料に触れない来館者や、専門家とは違う意見を持つ人たちの視点も必要になる。特に、文化財は地域との連携が必要なことも多いので、そういった資料を扱う場合には、より多様な見方が重要になると考えられる。

次に、デジタル資料を適切に扱えるスキルは、これからの学芸員に必須となってくるものである。近年のネットワークの発達により、博物館業界以外でも、ペーパーレス化やデジタル媒体を通じた発信が増えている。学芸員が扱う資料の多くはアナログのモノであるが、後期の実習で実施したようなデジタル展示などの需要も増加すると考えられる。また、デジタル展示は、いつでもどこでも誰でも閲覧することができる、資料の内部や資料の拡大図を見ることができるなど、アナログ展示には無い利点が多く存在するため、デジタル資料を適切に扱えることには大きな利点があると考えられる。



錦絵撮影作業。プロフェッショナルに指導を受ける

➤ 学部 工学科3年 柴山風

学芸員課程を通して、学芸員の仕事のなかで大切にすべき点は「作品を後世に残す」と「作品の魅力を多くの人に伝える」とことだと考えるようになった。またコロナ禍以降はオンラインの活用が必須になると思う。

オンライン上では一度掲載するとデータが残るため、作品を長く残せる。また、現地に行かずに、多くの人が比較的簡単にイベントに参加できるのも大きな魅力のひとつだ。前期の学芸員実習では、想像以上に様々なジャンルに関心のある方が参加してくださったことと、相互のコミュニケーションが概ね成功したことが印象的だった。一方で、オンラインがあるからこそ現地での体験を大切にする傾向も出てくるのではないだろうか。作品の質感や大きさ、照明による演出など画面越しでは伝わらないものも多い。生で見る楽しさを伝えることは、作品本来の良さを共有し、原本を残し続けるきっかけになると思う。

以上より、オンラインと現地の良い点を活かして素晴らしい作品を残し続けていくことがこれからの学芸員に求められると考える。

➤ 学部 工学科3年 川島夏月

実習を通して学芸員に求められるスキルは、情報を伝えるための空間をつくりだし、その空間を通して感覚を広げさせる技術だと感じた。

本実習では様々な立場の方の意見を聞く機会があり、デジタルの可能性や必要性、逆にデジタルでは得られないことなどについて考えを共有し合え、そのことをまた新たに整理できた。

例えば、ジャパンサーチを利用したウェブ展示作成では、ウェブ上であるからこそ、時間や場所の制約を受けずに、また目的別に様々な展示空間をつくりだし利用できる点があり、ウェブだからこそその楽しみ方や可能性を感じた。その一方で実物を見たり触ったり聞いたりといったことを表現するのは難しいという点も改めて強調された。

実際の博物館という“場”においても、デジタルのような“場”においても、その“場”を訪れる人は、自らの感覚が広がるために興味を持ったり楽しいと思ったりするのだと思う。それゆえに、学芸員はそのような感覚を広げる空間をつくりだすことが求められ、実際の博物館でもウェブ上でもその点では変わらないと感じた。

➤ 学部 工学科3年 小野寺翔汰

これからの学芸員に求められる力として私が考えるのは、「デジタルライゼーションスキル」です。

昨今よく耳にする「DX」という言葉は、「デジタルイゼーション」と「デジタルライゼーション」という2つに大分できます。前者が「単にデジタルへ移行させる」ものであるのに対して、後者は「デジタルをアナログの付加価値として活用する」ことを意味します。私はこのうち、後者のデジタルライゼーションがこれからの学芸員には必須であると考えました。

学芸員に最低限のICTスキルが求められるのはもちろんです。しかし、資料管理・展示を単にデジタルへ移行しただけでは（すなわちデジタルイゼーションのみでは）、来館者や研究への寄与とはなりがたく、各館の独りよがり終始してしまうでしょう。

学芸員の活動を今一度見直し、ICTを用いてより高い価値を博物館へ与えていく……こういったデジタルライゼーションスキルこそ、本当にこれからの学芸員に必要なと思うのですが、いかがでしょうか。

博物館支援団体報告

「コロナ禍での活動～次年度へ向けて～」

➤ 繊維技術研究会

今年度もコロナ禍で科学博物館に集うことに制限がある中、以下の活動を行った。

1. 動態展示機のメンテナンス：臨時休館明けの見学者対応に備えて。
 - ・HR型自動繰糸機：展示機脇に煮繭用機器を設備、給繭器洗浄、試運転等
 - ・織機（G型、阪本式、ジェット織機等）：試運転、たて糸整備、等
 - ※G型織機の整備、運転操作等に関して、前トヨタ産業技術記念館の主任に話を聞いた。
 - ・手動丸編機：故障を修理し、移動可能にした。
 - ・ミニチュア紡績機：カード機、精紡機等の整備、試運転
2. Zoomミーティングを7回実施し、活動内容報告、会員動向等の情報交換も行った。

3. 動態展示機のデジタルアーカイブ用録画撮影サポート。
4. 学芸員実習（前期）のガラ紡機デジタルアーカイブ演習のサポート。
5. 限定開館後に見学者対応（一部展示機の解説等）
6. 展示機に関わる開発史や産業史等の調査、報文化。
7. Facebook「東京農工大 科学博物館 繊維技術研究会<繊維のひとコマ>」でミニ情報発信。3月15日現在15件掲載中。

来年度の活動は、引き続き動態展示機のメンテナンス実施、デジタルアーカイブ化事業支援、動態展示ライブ配信支援、正規開館後の見学者対応、Zoomミーティング開催、等を予定する。

★コロナ自粛期間中の本年度に2名の会員オーソリティーを喪ったのが惜まれる。



今年度新たに導入した煮繭用設備

➤ 博物館友の会

コロナ禍で博物館の休館とともに、友の会の諸活動も2年間の休会になった。4月新学期の前に活動再開を迎えられるのか、3月になっても分からない。誰も予想していなかった事態に伝統工芸を学ぶサークル会員の焦燥はいかばかりであったか。上級生が下級生を指導するシステムは4年生にとっては伝承を途絶えさせる怖れを感じ、サークル活動継続の意欲維持に苦しんだ。また自身の所属サークル運営以外に全体のサポートを担う役員は二重の疲弊を味わっている。

友の会の活動が学生の課外活動と同じ制限下に置かれたことを「何故？」と問う声は今も会員の中に渦巻いている。1年経過した頃、ようやく役員もその状態を受入れ、制限内で何ができるか試行してきた。活動制限レベルが段階解除された昨秋からは、館長の許可を得て下級生の入館も実施できた。入会以来、はじめて学習室に入った会員もあり再開の期待に弾んだ。マネージャー役の4年生は「できる時に、できることを」の精神で活動再開に備えて準備を重ねてきた。レベルの上げ下げに一喜一憂しつつ、春を迎えている。

役員会では、コロナ状況は必ずしも好転しているわけではないが、たとえ時間が短い活動制限レベルが続いても、正規の活動として再開する。不安な状態で参加できない会員には休会制度により自己判断で休会、終息宣言を待つサークルも認める。全員でスタートできるのが望ましいが、3年生への継承が済まなければ全課程修了にならない4年生、これから更に4年生までの時間を確保できかねる下級生会員もいる。

コロナ世代と称されるのだろうか、児童、中高生、大学生、勤労者、様々な世代が等しくコロナから不利益を被っている。我ら友の

会会員も創意工夫で、状況に沿いつつ乗り越えていきたいと願っている。(oki)

➤ 博物館支援学生団体 musset 代表 阿部淳裕

コロナ禍で思うように活動ができなくなってから、早くも2年ほどが経ちました。本来の活動である、対面でのサイエンスコミュニケーションができず、歯がゆい思いをしています。私たち musset は、現在3年生が6名ほど、2年生が0名、1年生が4名となっており、その他に活動に参加して下さる4年生、院生の先輩方はいらっしゃるものの、非常に厳しい状況に置かれています。今年度は、入ってくれた1年生と交流を深めつつ、少しずつではありますが、サイエンスマルシェの実施にあたって必要なスライドのデザインスキルや発表の仕方などの継承を進めました。

来年度は、今の1年生が2年生になり、新しい1年生も入ってきて、多くの musset メンバーがサイエンスマルシェを経験していないメンバーになります。これからも私たちの活動として、サイエンスコミュニケーション活動を行っていくこと自体を変えるつもりはありません。しかし、対面・リアルタイムでのサイエンスマルシェにこだわりすぎず、状況に応じて、実現可能なサイエンスコミュニケーション活動を考え、行っていきたいと思えます。

閉架書庫での調査

～博物館所蔵の業界史・社史～

➤ 農学府農学専攻地球社会学コース修士2年 田中万祐子

修士論文のテーマの1つとして、私は日本におけるカバン製造の歴史について概観したいと考えていた。というのも、カバンは日本人の生活と切り離せない身近なアイテムであるにもかかわらず、その歴史を取り扱った研究は殆ど見られないからである。そして研究が見つからないというのはつまり、自分で一から資料を探す必要があるということだ。

途方に暮れていた私に光明をもたらして下さったのが、ゼミで一緒に暮らせていただいていた科学博物館の齊藤有里加先生だった。どうやら博物館に、日本のカバン業界の沿革が分かる資料が所蔵されているというのである。

博物館にお邪魔し、資料室を拝見して驚いた。カバンだけではなく、繊維、ゴム、金属、その他諸々。材料から製品まで。とにかく日本のありとあらゆる製造業に関する、業界史や社史が所狭しと並んでいたのだ。聞けば、博物館の創設にあたり、様々な業界から資料の寄贈を受けたのだという。私が探していたカバン・袋物・皮革に関する資料だけでも10点の所蔵があった。宝の山である。しかも、SiNii Books (全国の大学図書館の蔵書を横断検索できる) や NDL オンライン (国立国会図書館の蔵書検索) でヒットしないような、かなりコアでレアな資料までである。お蔭で修士論文は豊富な内容をもって執筆することができた。

しかし現在、これらの貴重な蔵書は一般には公開されておらず、本学図書館のOPACにも登録されていない。資料室に設置された古いカード目録で管理されているきりだ。私のように何らかの製造業の歴史について調べる学生が今後どれだけいるかは分からないが、ウェブ上でデータベース化されるなど、本学のみならず他大学の学生や研究者、興味をもった地域の人々にも利用可能になれば、お世話になった者としてこれほど嬉しいことはない。



博物館図書室には貴重な業界史・社史が多く保管されています

メディア掲載報告

➤ 小金井地区事務部総務室科学博物館係長 保池 琢

1. 資料貸出 6件

- (1) 編：佐野宏明『開化図案』（光村推古書院）掲載
生糸ラベル画像データ貸与
- (2) 鈴木堅弘（京都精華大学特別研究員）著
『「隠しアイテム」で読み解く春画入門』（集英社インターナショナル）掲載
錦絵「栄草当世娘」画像貸与
- (3) 小川ブリジッド（武蔵大学教授）著
『Tokyo nouvelle capitale de l'ere Meiji、東京、明治時代の新しい都』掲載
錦絵「富貴之春蚕之繁栄」他画像貸与
- (4) 「ほうじんむさしの2022年3・4月号」掲載
勸工寮葵町製糸場3D復元模型展示公開写真貸与
- (5) テレビ朝日「グッド！モーニング」内コーナー
「林修のことは検定スマート」2022年2月24日放送分
錦絵「蚕やしないの図」画像貸与
- (6) 「富岡産の桑木炭で描く 渡辺香奈 木炭画展」（2022年3月12-21日 於富岡製糸場）
錦絵「蚕養之全図 第三」画像貸与

「科学博物館ニュース速報」第50号

発行日：2022年3月25日

編集：科学博物館ニュース速報編集委員会

発行：東京農工大学科学博物館

連絡先：kahaku@cc.tuat.ac.jp

042-388-7163